



レナード・ウルフにおける自我と社会： 戦間期理想主義の政治心理学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-09-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 邦行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006280

レナード・ウルフにおける自我と社会

— 戦間期理想主義の政治心理学 —

西村 邦行

北海道教育大学旭川校政治学研究室

Leonard S. Woolf on Self and Society

— The Political Psychology of Interwar Idealism —

NISHIMURA Kuniyuki

Department of Politics, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

概 要

国際政治学史研究における戦間期理想主義の復権を受けて、レナード・ウルフの思想に対してもいくらかの再評価が行われてきた。しかし、彼が展開していた心理学的な思惟様式の意味については、未だ十分な検討が為されていない。本稿では、この心理学的な思惟様式こそが、彼の思想全体を貫く基軸であったことを明らかにした。人間の心理へ向けられた彼の関心の在り方を探るならば、彼の自我観と政治観には一定の連続性が認められる。この連続性に着目して彼を歴史の中に位置づけなおしたとき、戦間期の国際思想をめぐる論争は認識論上の対立として再解釈しうる。

はじめに

レナード・ウルフの政治思想に関する近年の再検討は、主に戦間期国際政治学史研究の文脈において推し進められてきた。〈現実主義者〉E・H・カーの道德論と、同じカーが退けたとされる〈理想主義者〉の政治論とが二つながらに再考される中で、ウルフは後者に属する代表的論客の一人として取り上げられてきたのである。¹ 例えば、ピーター・ウィルソンの著書では、ウルフ初期の議論を中心に、彼の社会主義的傾向とその国際政府論および帝国主義論との結びつきが描き出されている。² より個別的な論稿の形でも、戦間

1 Brian C. Schmidt (ed.), *International Relations and the First Great Debate* (Routledge, 2012).

2 Peter Wilson, *The International Theory of Leonard Woolf: A Study in Twentieth Century Idealism* (Palgrave Macmillan, 2003).

期の労働党内におけるウルフの役割を強調した研究は複数現れている。³ 学説史の文脈を共有していない日本の場合にも、やはりウルフの左派知識人としての立ち位置が注目されてきたところであって、1930年代のイギリスにおける平和論の多様性を活写した吉川宏の先駆的業績でも、議論の軸となっているのはウルフの主張の変遷である。⁴

これらの著作はそれぞれに説得力のある議論を展開している。ただ、いずれの研究も、ウルフの言説の内、直接の政策的含意を伴うような議論に分析対象を絞りすぎている嫌いがある。ひるがえって、ウルフの思想が根差していた基盤的な問題意識については、未だ踏み込んだ検討が行われてきていない。中でも彼の心理学的思惟は、精査の対象から外されてきた。以上の先行研究において、パトリオティズムといった個別の政治心理をウルフが論じていたこと自体は指摘されているものの、彼がそもそもなぜ心理に着目したかは問題にされていない。⁵

ウルフ研究が目下このような状況にあることも、理由がないわけではない。結局のところ、彼が展開した心理学的な思索は、体系的な知見へとまとめあげられることがなかった。彼の政治評論の中で最も浩瀚であり、人間心理の問題を前面に押し出していた『大洪水の後で』（1931年、1939年）にしても、その具体的な内容は近代ヨーロッパに関する半ば知性史的・半ば心性史的な分析に止まっている。「共同体心理に関する研究」というその副題にも拘わらず、心理的な要因が人間集団の行動に与える影響のメカニズムそれ自体を、同書が正面から扱っているわけではないのである。⁶ 加えて、同書の議論は全体像が把握しづらく、初期の国際政府論などに比べた場合、一つの作品として未熟と言うべき面も有している。先のウィルソンなども、「概して失敗作」としている所以である。⁷

ただ、同時代のイギリス知識人界では、同書も一定の評価を得ていた。⁸ そして、歴史的な文脈というこの問題に目を向けるならば、ウルフが心理学的な発想に関心を寄せていたことはいくつかの点で注目し得る。一つには、知性史の流れが想起されねばならない。19世紀半ば以降のイギリスの思潮を追うならば、進歩に信を置いたイギリス観念論の有機体的な社会像が潰えた後、ラッセルとムーアの分析哲学やマルクス主義と並んで隆盛を迎えたのが心理学・精神分析学であった。⁹ ウルフの心を捉えていた学知は、当時の先端を行く社会思想だったわけである。さらに文化史の流れに着目すれば、この精神分析学をとりわけ積極的に受容していたのが、他ならぬウルフらモダニストであった。彼と妻ヴァージニアこそは、共同経営の出版社ホガースからフロイト諸著作の翻訳を刊行し、その知見を英語圏に知らしめた最大の功労者ですらあった。¹⁰

3 Casper Sylvest, "Interwar Internationalism, the British Labour Party, and the Historiography of International Relations," *International Studies Quarterly* 48 (June, 2004), pp. 409-32; Lucian M. Ashworth, *International Relations and the Labour Party: Intellectuals and Policy Making from 1918-1945* (I. B. Tauris, 2007).

4 吉川宏『1930年代英国の平和論—レナード・ウルフと国際連盟体制』（北海道大学図書刊行会、1989年）。以上の他、イギリスの左派に関する研究の文脈でウルフの政治論に焦点をあてた論稿として、F. M. Leventhal, "Leonard Woolf and Kingsley Martin: Creative Tension on the Left," *Albion: A Quarterly Journal Concerned with British Studies* 24 (Summer, 1992), pp. 279-94; 籾田有紀子「レナード・ウルフと共産主義ロシア」『社会システム研究』11 (2008年2月), 111頁~123頁, 籾田有紀子「レナード・ウルフと初期冷戦」『社会システム研究』13 (2010年3月), 71頁~83頁。

5 先行研究中の該当箇所としては、Wilson, *Leonard Woolf*, pp. 44-48; 吉川, 前掲書, 242頁~256頁。

6 L. S. Woolf, *After the Deluge: A Study of Communal Psychology, 2 vols* (The Hogarth Press, 1931 and 1939).

7 Wilson, *Leonard Woolf*, p. viii.

8 例えば、C. D. B., "Book Review," *International Journal of Ethics* 42 (April, 1932), pp. 336-37.

9 Francis Mulhern, *The Moment of 'Scrutiny'* (NLB, 1979), pp. 12-15.

10 ホガース社におけるフロイト著作集刊行の経緯については、J. H. Willis, Jr., *Leonard and Virginia Woolf as Publishers: The Hogarth Press, 1917-41* (University Press of Virginia, 1992), chap. 8. なお、ウルフもフロイトの議論に全面的に同意していたわけではない。後年の書簡で彼は次のように記している。「フロイトは知に対して目覚ましい貢献を為したし一級

上記の先行研究が棹さしている国際政治学史再考の流れからしても、ウルフが心理学的な発想をとっていたことは重要である。というのも従来、戦争に代表される国際社会の事象を人間の無意識的本性から説明しようと試みていたのは、ウルフら理想主義者を批判した現実主義者たちの側とされてきたからである。¹¹ その上で、この古典的現実主義の側から不当に貶められたがゆえに、理想主義は従来低い評価を与えられてきたというのが、今日の研究者らが概ね共通して述べ立てているところである。だとすれば、現実主義特有の論点とされてきた人間本性という問題について、理想主義者らがどのような見方を有していたか明らかにすることは、彼らにより適切な歴史上の位置を与える上で避けて通ることのできない課題と言える。¹²

このように、ウルフが心理学的な視座に関心を抱いていたことは、その至りついた先が精緻な理論的考察ではなかったとしても、複数の文脈において見過ごしがたい意味を持っている。ひるがえって、そうしていくつかの領域で注目されるべきこの心理学的な視座からは、政治理論家にして文芸評論家という彼の多面性を統括的に見る手掛かりが得られるものと期待できる。

以上の問題理解を背景として、本稿では、ウルフの政治心理学者としての姿へと迫っていく。まず前半では、彼の諸作品において心理学的な思惟様式が常に顔を覗かせていたことを確認する。この際、大戦間期の彼が政治評論と文芸評論の両方で用いていた動物と人間との類比に着目し、彼の心理学的な視座に内包されていた人間観を掘り起こす。その上で、後半では、この人間観が彼の彼自身に対する捉え方、つまりは彼の自我観と絡み合っていた点を指摘する。こうして本稿全体としては、ウルフの人間観・自我観にこそ彼の政治思想を貫く基底的な問題関心が認められることを明らかにする。

一点留意しておくとして、ウルフの文章が論述的というよりは散文的であったことに鑑みれば、これら自我観・人間観・政治観の繋がりを明確な形で論証することはおよそ不可能ではある。ただ、しかし、そうした散文的なテキストであるからこそ、著者の人格を軸に置く以外の方法でその思想的な一貫性に迫ることは困難が大きい。この点において、本稿の手法は、消極的ながらに一定の妥当性を有しているものとする。

また、本稿が目指すのは、彼の自我観から直ちに彼の政治観が導き出されるといった結論や、彼の政治思

の書を記したと思いますが、その中には同意できないものが多く存在するし、いくらかは馬鹿げていると思います」。L. S. Woolf to Lyn Irvine Newman, 1 August 1957, in Frederick Spotts (ed.), *Letters of Leonard Woolf* (Harcourt Brace, 1989), p. 359. また、より早い時期の書評でも、フロイトは面白い知見を提示しているが、まとまった視座は提供していないとしている。L. S. Woolf, "Everyday Life," *New Weekly* (13 June, 1914), p. 412. こうした事実にも鑑みて、本稿でも、ウルフが個々の論者に受けていた影響の在り方は問題とせず、彼がどのような関心から心理の問題に目を向けていたかに焦点を絞りたい。なお、今日の文学研究においても、モダニスト作家たちの精神分析的な視座を理解する上で、個別の思想家の影響は必ずしも重要でないことが指摘されている。遠藤不比人『死の欲動とモダニズム—イギリス戦間期の文学と精神分析』(慶応義塾大学出版会, 2012年)。

11 近年、現実主義をその人間本性観から再評価する動きがあるのは、この事情を物語っている。例えば、Robert Schuett, *Political Realism, Freud, and Human Nature in International Relations: The Resurrection of the Realist Man* (Palgrave Macmillan, 2010).

12 今日の研究者たちも、この論点に気付いていないわけではない。しかし、彼らの立論は往々にして、理想主義者たちが人間の本性という言葉を用いていたことを事実として指摘する以上のものになっていない。例えば、理想主義復権の先駆的研究となった論文集の中でノーマン・エンジェルを取り上げた論稿でも、エンジェルが戦争に認めた非合理性は功利的観点からの無益さと同視されるものであり、そうした意味で非合理性の問題に気付いていたエンジェルは現実主義者であったとされている。このような立論において、非合理性という概念は深く考察されることがないまま理性の例外と位置づけられているに過ぎないのであり、その非合理性を無意味と否定し去ったエンジェルらはやはり理性を信奉する理想主義者であったということになる。J・D・B・ミラー「ノーマン・エンジェルと国際関係における合理性」デイヴィッド・ロング／ピーター・ウィルソン(編)『危機の20年と思想家たち—戦間期理想主義の再評価』(宮本盛太郎／関静雄監訳, ミネルヴァ書房, 2002年), 111頁～136頁。

想が心理学に還元されるといった結論などではない。¹³ 以下では青年期から晩年までウルフの自我観に一定の連続性があったことも指摘するが、だからといって、例えば、彼が1900年代から一貫して反帝国主義者であったなどというのは、本稿の主張するところではない。¹⁴ 本稿が取り組むのは、ウルフの自我観と人間観がその政治観と親和的な形で存立していたことを示すという、よりささやかな課題である。そして、その限りで彼の政治思想を下支えしていた基底的な問題関心を浮かび上がらせ、その全体像の解明に向けた糸口を手繰り寄せることが、議論の最終的な目標である。

1. 内なる野性

まずは、ウルフの政治論が、非常にしばしば、人間の心理に関わる言葉を伴いつつ展開されていたことを確認しておきたい。実のところ、ウルフは、その知的活動の初期から、心理の問題に対して高い関心を示していた。労働者の境遇、国際政府の在り方、帝国主義の功罪という、当時の彼がその知性を傾けていた全ての主要な政治的争点において、心理の問題は中核的とすら言える位置を占めていたのである。

最初期の著作から順に見ていくと、まず、セイロンでの植民地官吏の仕事を終えた1910年代前半、執筆活動に入ったばかりの彼は、科学的管理論の問題を取り上げて、その中心的論点は「産業に対する精神と人格の関係」であるとしていた。¹⁵ 国際関係論における最初の代表作『国際政府』(1916年)でも、「人間とは、国民的なまとまりにあっても国際的なまとまりにあっても、未だ秩序立っているわけでも理性的であるわけでもない動物」、「情念と偏見の動物である」とされており、彼らが創り上げている主権国家の行動もまた「何を欲しているか、その欲望を押し付けられるほどに強いかな」を基準としている以上、「国際政府への歩みは男女が今日を生きんと欲するという類の生からくる自然な衝動に拠って」というのが彼の問題認識であった。¹⁶ 続く1920年代初頭、国際主義への足枷となっている経済的帝国主義を批判した際に彼が企図していたのも、「歴史においては、出来事の論理も事実の論理もなく、人々の信条と理想の論理だけがある」という理解を基に、「政策の名で知られるところのヨーロッパ人の欲望と信条を研究すること」であった。¹⁷

時代をさらに下って1930年代へ至りつくと、前述の通り、こうした彼の問題関心は、『大洪水の後で』に結実することとなる。第一次世界大戦が原因においてもその後への影響においても極めて心理的な現象であったことを指摘するところから、同書の議論は開始されるのであって、曰く、「あることを考え、ある目的を欲し、ある行動を意図した人間たちがいなかったならば、戦争は決して始まらなかった」。¹⁸ この点、

13 ウルフ自身、「戦争の原因はあまりに複雑かつ多様で、経済学だけとか心理学だけとかで扱いきれぬものではない」と述べていた。L. S. Woolf, "War and Capitalism," *New Statesman and Nation* (16 February, 1935), p. 210.

14 ウルフを帝国主義者と見るかその批判者と見るかは容易に判定を下しがたい問いであり、それに対して答えを与えることは本稿の射程を超える。このテーマを扱った論稿として、Gillian Workman, "Leonard Woolf and Imperialism," *Ariel: A Review of International English Literature* 6 (April, 1975), pp. 5-21; T. J. Barron, "Before the Deluge: Leonard Woolf in Ceylon," *The Journal of Imperial and Commonwealth History* 6 (October, 1977), pp. 47-63; Peter Wilson, "Leonard Woolf: Still Not Out of the Jungle?" *The Round Table: Commonwealth Journal of International Affairs* 97 (February, 2008), pp. 147-60.

15 L. S. Woolf, "Psychology and Industrial Efficiency," *Cooperative News* (19 April, 1913), p. 491.

16 L. S. Woolf, *International Government* (Allen & Unwin, 1916), pp. 80, 28, 169.

17 L. S. Woolf, *Empire and Commerce in Africa: A Study in Economic Imperialism* (Allen & Unwin, 1920), pp. 8, 69. 時代を下って、1941年に講演のために用意されたと思われる未公開のメモでも、「国際主義とは国際政府の心理である」といった表現が認められる。L. S. Woolf, "Lectures on Causes and Issues of the War," Leonard Woolf Archive, University of Sussex Library, Part I-O-1.

18 Woolf, *After the Deluge, I*, p. 28.

集団心理の問題は、同時代を特徴づける色彩を帯びた問題であったが、しかし他方でまた、人間社会の原動力一般に関わる問題でもあった。「大抵の時代の大抵の民族において、社会構造と共同体心理とのこの相互作用は決して止むことがない。それはおそらく、あらゆる文明の漸次的変化、進歩、退化に与る主因である」。¹⁹

この認識から、同書では、フランス革命以降のヨーロッパ心性史が描き出されていくが、既に指摘した通り、そこにおいてウルフの心理学的な視座が体系的にまとめあげられているわけではない。その点、本稿の射程からは、大戦間期に書かれたいくつかの著作の方がより重要である。中でもとりわけ注目に値するのが、人間社会を動物界に例える形で風刺した一連の作品である。²⁰ 結論から言えば、人間もまた動物に過ぎないと指摘し、人間の非合理的な本性を述べ立てることこそ、人間と動物とを並列させた彼の目指すところであった。以下、この表現方法から浮かび上がってくるウルフの人間観について検討を進めたい。

ウルフの諸作品の中で、人間社会と動物界とのアナロジーが特に象徴的な形で表現されている著としては、何よりもまず1925年の『恐怖と政治』を挙げることができよう。²¹ 動物園の生き物たちが実は高度な知性を有しており、日頃から人間を観察しているという意匠の下、エサの配給にも影響を与えているとしてその動物たちが戦争および政治を議論し始めるところに、同書の叙述は開始されるのである。

この作品は20頁余りの小冊子に過ぎないし、そこで掲げられている政治的な見識も、それ自体として目新しいものではない。要約すると、ボールドウィンらの保守主義と革新的なボルシェビズムとの対比を通じてそこで示されているのは、統治というものが押し並べて恐怖を利用して遂行される活動であること、愛国心というのも他国への恐怖を利用した統治の手段でしかないこと、したがって、政治を軸に展開されてきた人間社会の歴史は非合理的な行動の反復であったことである。ただ、重要なのは、動物のアナロジーという技法の行きつく先が、人間の非合理性という問題だったことである。1914年の時点でウルフは既に、「恐怖ほど人間の知性を攪乱させる感情はない」と述べていたが、『恐怖と政治』の主たるテーマは、その題名にも明らかなように、集団としての人間が体现する非合理性であった。²² この非合理性を描く上でわざわざ動物が引き合いに出されたとき、その含意はつまり、人間とは、野蛮な存在として自分たちが檻に閉じ込めた動物たちから見ても非合理的な生き物である、ということに他ならなかった。議論の末尾で象が提出している結論は、この点を明瞭に示している。

今夜の我々の議論からして、人間が未だジャングルに生きているということは明らかである。彼らは我々から教訓を学ぶべきである。この地において我々は、囚われて、平和に、幸せに、恐れることなく、文明化されている。この地において我々はそれぞれ、別々の檻にしっかりと閉じ込められ、他のあらゆる動物とのあいだにおいて、害することもなければ害されることもなく、怯えさせることもなければ恐れられることもない。人間も、自分たちが我々に行ったのと同じことを自身に行わないならば、幸福になり、文明化され、恐れずにいられるようにはなるまいというのは、明らかなことではないだろうか。²³

19 *Ibid.*, p. 56.

20 実に、『大洪水の後で』にしても、「社会的な動物としての人間の心理」に関する研究であった。*Ibid.*, p. v.

21 L. S. Woolf, *Fear and Politics: A Debate at the Zoo* (The Hogarth Press, 1925).

22 L. S. Woolf, "The Peril of Timidity," *Cooperative News* (23 May, 1914), p. 637.

23 Woolf, *Fear and Politics*, p. 24. さらに1937年の時点では、「1928年以降、状況を支配してきたのは、この力と恐怖の問題です」と述べている。L. S. Woolf to H. M. Swanwick, 1 October 1937, in Spotts, *Letters*, p. 413.

その上で、作品の半ばには、「政治に関わる問題において……人間は他の問題におけるよりも非合理的で不安定に見える」といった言葉も見られる。²⁴ とりわけ集団という形をとったときに人間はより非合理的であるというのならば、ウルフにとって、複数の人間がともに生きる中で立ち現われてくる政治という活動こそは、動物のアナロジーを用いて論ずるのに最適なテーマだったということであろう。

確かにウルフは、芸術評論においてもまた、動物との類比というこの表現方法を用いてはいた。しかし、彼にとって、芸術とはそもそも、その社会的意味において政治と相通底する営みであった。1927年の評論集『エッセー』に収録されたある論稿で彼は、ジャンルとしての詩を、「時代の創造的な精神」に最も接近する文芸領域と捉え、さらには「ある時代が知的・精神的に秘めていたところと、それらが向かっていた方向とについて何かしらの知りたいと思うなら、まず読むべき」ものと位置づけた上で、「99パーセントが受け入れ1パーセントが離脱しようとしているところの伝統をめぐる、過去と未来とのあいだでの戦いは、いつでも文芸の中で起こっている」と述べている。²⁵

ひるがえって、芸術を論じる上で採用されていた動物のアナロジーにもまた、人間社会の非合理性に関する政治的な含意が込められていた。1927年の『ハイブラウを狩って』において、この点はよく現れている。書名にも「狩り」の語が含まれており、ウルフ自身が冗談めかして述べているところ、「ハイブラウの自然史と彼を狩る理由についてのノート」こそがよりの確な題名であるというこの作品において、動物のアナロジーは全篇に散りばめられている。実に、そこで検討の俎上に載せられているのは、*altifrons aestheticus* など擬似的なラテン語学名表記を基に5「種族」へ分けられたハイブラウの「生態」である。²⁶ そして、その議論の具体的な中身はと言えば、一方に芸術的価値が大衆の心に響くことを否定する見方を、他方に芸術的価値は最終的には誰にでも理解されるという見方を置きつつ、芸術を芸術足らしめているものとは何かを問う形で進められるハイブラウの擁護こそがそれであったが、そこでは人間社会に半ば不可避的ともいえる非合理性が暴き出されているのである。

芸術的なものがしばしば難解であることを、ウルフはまず認める。「優れた文学のほとんどは容易く読んで理解できるものではない。それはしばしば極めて退屈である。面白かったり愉快だったりするのは、ごく稀である」。²⁷ ただ、だからといって、芸術的価値の源泉にある何かが大衆の心を惹きつけるものを持っていないということにはならない。芸術的な要素を帯びたものは時代を超えて残ることからして、「真に芸術的価値というものは、ともかくも限られた程度においてはあれ、人々を惹きつけるいくばくかの力を確かに持っている」。²⁸ したがって、芸術的価値の高い作品は、往々にして刊行当初には大衆から目を向けられないとしても、次第に多くの人に知られるところとなり、最終的には安価な文庫などの形で入手可能となるに至る。

他方で、そうして結果的に大勢の人の手に取られることとなる作品が、当初は好評を博すことが稀であるのもまた、その同じ芸術的価値が原因である。以上の議論からすると、芸術的価値を含む作品は、ただ娯楽としてのみ機能する作品とは定義上その価値の有無において異なることになる。だとすれば、当初から受けの良い芸術作品ですらやはり、ただ読みやすい作品と違う何かを読み手に感じさせるものなのであって、ひるがえって芸術的価値なるものは、筋立ての巧みさや魅力的な人物造形の外に求められなければならない。

24 Woolf, *Fear and Politics*, p. 18.

25 L. S. Woolf, "The Modern Nightingale," in *Essays on Literature, History, Politics, etc.* (The Hogarth Press, 1927), pp. 91-92.

26 L. S. Woolf, *Hunting the Highbrows* (The Hogarth Press, 1927), pp. 5-6.

27 *Ibid.*, p. 29.

28 *Ibid.*, p. 33.

「良き小説作品に含まれる、美に必要なものというのは、上手い筋立てや興味深い登場人物を創り出すことに書き手が専心することを不可能にする」。²⁹ その上で、芸術的なものを生み出す技法に関しては、時代が下るに従い人々が馴染んでいくことで理解が深まっていく面もあるがために、時間の経過によって芸術作品の受容は進んでいくこととなる。

以上の芸術論が一種の大衆社会論でもあることは見て取りやすい。一方において、ウルフは必ずしも大衆社会を批判しているわけではないようにも思える。しかし、何か語りがたいものとして芸術的価値なるものを高く評価し、それを理解する審美観に優れたハイブラウを、大衆から分け隔てられた存在と捉えてはいる。この意味において、一般に真理性を帯びたものは社会の中で得がたいものであると、彼は確かに考えていた。

そして、この点にこそ、人間社会の非合理性に関する彼の認識は浮かび上がっている。『ハイブラウを狩って』の続く箇所においては、同じくハイブラウという言葉で指示される知識人についての考察が提示されているが、ウルフはここで以下のように議論を展開している。知性を用いるということ、それによって何かを解き明かすことは愉楽を覚えさせることである。しかし同時にそれは、宗教から政治体制に至る「錯覚と偏見の上部構造」の基礎を突き崩すものであるがゆえに、必然的に多くの人々からは気に食わないものと認識されることとなる。³⁰ 「したがって、知的ハイブラウの力はたちまち消え去るが、彼が恐るべき動物であるという記憶、彼の中には常にあの危険なものが潜んでいるという意識は残る」。³¹

ウルフの見るところ、理性がその力を発揮する機会は、人間社会においてはほとんど構造的に阻まれているのである。確かに彼は、理性が人間をより善い生き物へと押し上げていくことに信頼を示している。「私はなお確信しているのだが、人々が共同体の事柄に関して情念と偏見ではなく知性と理性に発言を許したならば、卑しむべき醜いこと・惨めなことの相当数は社会から消えてしまうであろう」。³² 大衆も次第に審美観を身につけていくという先の主張と併せると、ここに見られるのは、従来彼に付与されてきたのと同じ啓蒙家・進歩主義者のイメージである。ただし、それではこの信念は実現されうるかという点になると、彼の言葉には留保が付されている。今の引用に先立つ箇所で、ウルフはこう述べている。「集団の中の人々は決して互いに対して合理的に行動しないし、社会を実際に組織する上で理性や知性にいかなる恒久的な場も許しはしないというのが人の心理であるならば、*altifrons altifrontissimus* [いわゆる知識人]の絶滅は早ければ早いほど世界にとってよい」。³³ この言葉は反語的な表現として読むべきであって、ウルフの本心と捉えることはできないであろうが、重要なのは、ここにおける彼の問題認識の在り方である。つまり、理性を活用していく上でも、それに先立って、理性の意義を評価する（間主観的な）理念・情念の在り方が問題であると考えられているのである。実際、ウルフの見るところ、政治の主たる問題とはそもそも、理念や信条の転換に関わるものだったであろう。「政治的・社会的な観点から最も重要なことというのは、憲法や議員立法ではなく、総選挙や政党の浮沈でもなく、我々の観念……で起こっている変化なのである」。³⁴

以上のように見てくると、動物のアナロジーという手法には、同時代における理念・情念の在り方が構造的に非合理的なものへ傾いていることを強調する意図が含まれていたと言える。この手法は、1935年の『ガーガー』において、ウルフの人間観を浮き彫りにする形で展開されるに至るであろう。「ヒトラー氏のアーリア人至上主義のいんちき (quack, quack) は……ガチョウのガーガー (quack, quack) である」という中ほ

29 *Ibid.*, p. 34.

30 *Ibid.*, p. 44.

31 *Ibid.*, p. 48.

32 *Ibid.*, p. 50.

33 *Ibid.*, p. 49.

34 L. S. Woolf, "Can Democracy Survive?" in Mary Adams (ed.), *The Modern State* (Allen & Unwin, 1933), p. 15.

どの一節にも明らかなように、同書では、題名自体が既に、動物との比較から人間の非合理性を示唆するものとなっている。³⁵ そして、前半では政治家のムッソリーニとヒトラーを、後半では知識人のカーライル、ニーチェ、シュペングラーらを取り上げて展開されるファシスト非合理主義の批判こそが、同書の主眼である。その上で、ここでの政治論には一つの文明史論が伏流しているのであって、彼の動物論が組み込んである人間観もそこに垣間見ることができるのである。

議論はまず、黎明期の人間社会に思いを馳せるところから開始される。ウルフの言うところ、人間もまた数十万年前には一個の動物であった。しかし、理性の目覚めを受けて、彼らは最初の文明へと進んでいった。ただ、「ほとんどすぐに、彼は精神に嵌められた枷を置き換え、共同体を新たな袋小路に向かわせていった」。³⁶ この袋小路をもたらししたのは、自然や宇宙をめぐる呪術的な観念であった。そうした観念は、日々の生活における諸事実と合致しない信仰ではあった。しかし、人に自負心を与えるのはしばしばこの手の誤った信念である。そして実際の歴史においても、これらの信念は、事実と整合しないからこそ、疑義を許さない絶対的な真理へ祀り上げられていった。ここに至って、共同体の礎を築きあげたはずの理性は崩壊し、「生の全てはいかさま師のいかさまに支配された」—「未開人の精神と社会は風習、習慣、迷信のこの鉄の枠の中に支障なく閉じ込められたのであった」。³⁷

その後、人間はこの呪術的段階をも脱しはした。しかし、歴史を通じて文明は盛衰を繰り返してきたのであり、人間の中には、今日もなお、動物的な本能が眠っている。ウルフは、かつてセイロンのジャングルで道に迷い「純粹に動物的な混乱」を覚えたという自らの体験を持ち出した上で、「文明化した人間の心理の下で、半ば退化せしめられ抑え付けられながら、しかし持続している未開人の心理についても、同じことは当てはまる」と言う。³⁸ 人間社会は、その構成員たる人間の本質からして、非合理的な信条によって動かされる危険を常に蔵しているというわけである。1939年の書『門前の蛮人』で改めて述べられているところから言葉を借りれば、「野蛮人は我々の面前にだけいるのではない。彼はいつも私たちの文明の壁の内側に、私たちの精神や心の中にいるのである」。³⁹

ここでもやはり、ウルフは、人間社会が構造的に非合理性を帯びていることを指摘しているわけであるが、その中であって、動物のアナロジーは、こうした非合理性の淵源が人間の本性に遡るものであることを示唆している。ひるがえって、彼の人間・社会理解に照らした場合、政治を論ずる上で心理学的な知見は不可欠ということになる。人間が動物的な本性を有しているとの前提に立つウルフにとって、政治学は常に政治心理学でなければならなかったのである。

実際、このように捉えてこそ、ウルフの政治思想は一貫したものと解することが可能である。『ガーガー』の叙述を続けて見ていくなれば、彼のファシズム批判も以上のような人間観がその根拠を成している。文明人の中にも眠っているという動物的な性質の内、ウルフが殊更に強調したのは、「優越感に浸ろうとする未開の原始的な本能」であったが、呪術的社会において現実を言い表してはいないのに絶対的真理とされた各種信条と同様、こうした本能に基づく直観もまた誤ったものであるとすれば、ある共同体の成員たちが自分たちのあいだに存在するとしばしば「信じている優越性は、共有された妄想」に過ぎなかったということになるのである。⁴⁰ そして、だからこそウルフは、『ハイブラウを狩って』におけると同様、『ガーガー』におい

35 L. S. Woolf, *Quack, Quack!* (The Hogarth Press, 1935), p. 105.

36 *Ibid.*, p. 14.

37 *Ibid.*, p. 15.

38 *Ibid.*, p. 20.

39 L. S. Woolf, *Barbarians at the Gate* (Victor Gollancz, 1939), p. 83.

40 Woolf, *Quack, Quack!*, p. 90.

でも、集団心理に影響を与えうる存在としての知識人に期待をかけねばならなかった。同時代におけるヨーロッパ文明の危機にしても、「階級闘争、民族間闘争、アナーキーな国際環境、経済的帝国主義といった事柄」は状況の原因というより結果であり、「少数の人々が文明とその利点を大勢の人々と共有しようとしないうこと」こそが、彼にとっては最大の問題だったのである。⁴¹

ここにおいて国際政府論や帝国主義論との関わりが示唆されている通り、ウルフが知的生活の初期から人間の心理、欲動、衝動へと目を向けていたこともやはり、同じ人間観を背景に据えることでその所以を理解することが可能である。『ガーガー』の議論においてはファシズムがこうした妄想の権化であり批判の対象であったが、同じ社会観から導き出されるべき文化相対主義的な認識からすれば、誤った信条に基づく傲慢としての帝国主義もまた同様に棄却されねばならなかったし、それに代わって現れるのも諸文化を同等に評価する国際主義でなければならなかったと言いうるわけである。⁴² 国際政府論や帝国主義論を生み出した時期のウルフが既に、人間を動物との類比で捉え始めていたことは、少なくとも確かである。1914年の時点で彼は、人間の戦闘的本能といったこの擬似フロイト主義的な観念から第一次世界大戦を分析していたし、同じく第一次大戦中の別の論稿では、「人間の精神の中で急に出てくる純粋な動物的本能」といった言葉を用いてもいた。⁴³

1920年代以降、ウルフが動物のアナロジーをより頻繁かつ明示的に用いるようになったのは、その悲観的な人間観と政治論とを結びつける必要が彼の意識により鮮明に浮かび上がってきたためであろう。「1914年から1918年までの戦争期間中、ヨーロッパは野蛮へと戻る道の大きな一歩を踏み出したが、1923年から1933年にかけて別のさらに大きな一歩を踏み出した」という1933年の言葉、「1914年に先立って存在し、1925年から1939年のあいだに連盟の放棄によって復活させられた権力と権力政治のシステム」という1939年の言葉にも見られるように、1920年代半ば以降は彼にとって新たな危機の時代であった。⁴⁴ 非合理性とは人間の根本条件なのではないか、むしろ理性の方こそが人間の動物性をかろうじて包み込む薄い表皮に過ぎないのではないか—このような問題認識が、この時期、動物のアナロジーという形で表現されていたように思われる。事実、同じ1920年代半ばには、ウルフの文明論もやはりより悲観的な色彩を帯びてきているのであって、『エッセー』所収のエラスムス論なども、「真に文明化された人間」の登場が「世界史上で極めて稀な現象」であるとの言葉から始まり、歴史が進歩であるなどというのは「妄想」で、野蛮な行動こそが人の世を創ってきたと続けられている。⁴⁵

こうしてウルフの人間観と政治観とは、その初期から、ある程度一貫して相補的な関係にあったと解することができる。ただ、では、動物のアナロジーをもたらししたその原初的な直観はどこに由来するものだったのであろうか。『ガーガー』の記述の背景にも具体的なジャングル体験が据えられていたことなどからして、この点を理解する上では、ウルフ自身の生に目を向ける必要があると思われる。結論から言えば、人間社会

41 *Ibid.*, pp. 27-28. 近い時期の書簡でも、次のような言葉が認められる。「我々は伝統的に……その道具〔知性〕を実際的な事柄、特に政治上の事柄に用いることに不審を抱いてきたということ、社会の変化によってこの不審が19世紀におけるよりも全国的に危険なものとなったことも事実だと、私は思います」。L. S. Woolf to Marquess of Crewe, 30 July 1940, in Spotts, *Letters*, p. 424.

42 ウルフの視座が今日で言うところの文化相対主義的なものであった点は、Wilson, *Leonard Woolf*, p. 110.

43 L. S. Woolf, "Theory and Practice," *New Weekly* (8 August, 1914), p. 240; L. S. Woolf, "The Inhuman Head," *New Statesman* (8 July, 1916), pp. 327-28.

44 L. S. Woolf, "Introduction," Woolf (ed.), *The Intelligent Man's Way to Prevent War* (Victor Gollancz, 1933), p. 7; L. S. Woolf, *The War for Peace* (Routledge, 1940), p. 96.

45 L. S. Woolf, "A Civilized Man," in *Essays*, p. 149.

に関する彼の問題認識と彼が自身の自我に関して有していた認識とは、高度に親和的な相貌を示していた。次節では、生涯に渡ってある程度一貫していたウルフ自我観が以上の間観・政治観と通底する形で存立していたことを指摘し、ここまでの解釈をさらに補強することとしたい。

2. 格子裏の生

トートロジカルかついささか内容空虚な言い方にはなるが、人間をその深奥にまで踏み込んで解明しようとするウルフの心理学的な思索は、人間への強い関心が前提になかったならば成立しえないものだったであろう。20世紀初頭のイギリスにおいて、彼はモダニスト集団ブルームズベリー・グループの中核を占めていたが、そもそも組織立った存在ではなかったその面々を繋ぎとめていたのも、人間への関心であったとされる。⁴⁶ そして、ウルフ自身、「不可思議なものは数多あるが、人間ほど不可思議なものもない」といった言葉を折々に発している。⁴⁷ ここで「不可思議な」と訳出した語の原語は wonderful であるが、その指し示すところは文字通り wonder に満ちているということであって、ウルフにとって人間とは、不可思議であり、ゆえに深く知りたいと思わせる、知的好奇心の対象であった。

その上で、『ハイブラウを狩って』でも触れられていたように、知的に何かを解き明かす営みは、彼にとって楽しみを覚えさせるものであったが、こうして彼が個々の人間からその集団的な活動までを一種の鑑賞対象とした中では、彼本人もまた、同じ人間として深く考察すべき存在足りえたはずである。そして実際に彼は、自身の生について語った自伝を全5巻・計1000頁以上の大部の書に仕立て上げたのであった。人の生には観察すべき何かがあるとして、彼にとっては、彼自身にもまた読み解くべき何かがあり、その彼についての叙述は、長大な文章でもって、同じ興味関心を抱く読み手の娯楽に供せられうるものだったのである。

自伝の記述を追っていくならば、ウルフにとって彼自身が不可思議な対象であったことは、具体的な言葉でもって示されている。第1巻の冒頭で記されているところによると、そもそも彼が「自分の過去や未来を考えることは極めて稀であ」って、自伝を書くという段になって自身を振り返ってみても、浮かび上がってきたのは、「ある時点で闇と無の中から突然に現れ、まもなくまたある時点で無と闇の中に消えていく」存在でしかなかったという。⁴⁸ 生に最終的な目標や意味を求めず、したがって一貫性も強くは求めない、こうしたある種の達観は、モンテニューの言葉を借りた『到着より道中が肝要』という自伝最終巻の題名にも反映されている。⁴⁹

確かにウルフも、自身の人格に対して、認知可能な何かしらの連続性を認めてはいる。「人の性格の大枠

46 例えば、橋口稔『ブルームズベリー・グループ—ヴァネッサ、ヴァージニア姉妹とエリートたち』（中公新書、1989年）、12頁。

47 L. S. Woolf, "The First Person Singular," in *Essays*, p. 109.

48 L. S. Woolf, *Sowing: An Autobiography of the Years 1880-1914* (The Hogarth Press, 1960), p. 11.

49 L. S. Woolf, *The Journey Not the Arrival Matters: An Autobiography of the Years 1939-1969* (The Hogarth Press, 1969), p. 172. 同様の指摘として、Spotts, *Letters*, p. 3. ウルフがこれだけの長大な自伝をこのような題名の下に記したということは、文化史的に見ても、彼が同時代の人格観を象徴的に体現していた様子を示唆している。友人のリットン・ストレイチー、妻のヴァージニア・ウルフ、その愛人ヴィタ・サックヴィル＝ウェストの夫ハロルド・ニコルソンといった彼の周囲の人々は、挙って伝記（論）を著していたが、彼らが共通して取り上げたのは、伝記が文学か科学かという争点であり、その背景には、人間がどの程度までまとまりのある存在でありどの程度にそうではないのかという問いがあった。この点については、Laura Marcus, *Auto/biographical Discourses: Criticism, Theory, Practice* (Manchester University Press, 1994), chap. 3; Max Saunders, *Self Impression: Life-Writing, Autobiographical Fiction, and the Forms of Modern Literature* (Oxford University Press, 2010), chap. 11.

は幼時期に形作られ、3歳から83歳までのあいだに変わるものではない。⁵⁰しかし、では、ウルフ本人において、その性格の内容がどのようなものだったかと言えば、やはり全ては無に帰すのだという「宿命論的で半ば面白がる形での諦め」のそれであった。「私は決してくよくよしない。というのも、結局は問題になることなどないのだと思って救われるからであり、運命が私に降り注がせる残酷でしばしば不当だが予期される殴打を、私は楽しみつつ距離をおいて見ることができるのである」。⁵¹ウルフにとって、自身の人格とは、何かの不在ということと言い表されるような、宙づり状態にあるものであった。

ここで注目すべきは、ウルフの知的な鑑賞活動が、自身の自我の在り方と絡み合いながら、あくまで距離をとって行われるものだったことである。人間の生に対してウルフが感じていた面白さは、同じ生に対する浮遊感と表裏一体だったわけである。先に触れた自伝第1巻冒頭のすぐ後の箇所では、ウルフは次のように記している。「非存在から非存在へのこの移り行きは、奇妙で、かつ全体として面白い、そんな経験に思える」。⁵²彼にとって、生が不可思議で興味深いものと映ったのは、それが自分から切り離されてどこかよそよそしいものであったからに他ならない。⁵³

自分というものがあつかないために客体化できるという上の感覚について、ウルフは、自伝第3巻でも改めて触れている。リルケの詩『豹』をエピグラフに掲げつつ彼が言うところ、(第一次大戦時の)自分は何かの格子を通して世界を見ているような気分であった。しかし、実のところは、一生にわたって格子だけを見ていたのではないだろうか。「私の精神、私が魂というものを持っているとして私の魂は、過去82年間、[出自や家族といった]これら格子の裏から、格子を通して見つめつつ、前へ後ろへと豹のように行きつ戻りつしてきたのであって、そうしてひどく疲れてようやく目にしたのも、世界や生ではなく格子だけ—1000の格子があるだけでその背後に世界などない—だったのではないだろうか」。⁵⁴

理性をもって世界を統合的に認識し把握しようとしてきたはずのウルフは、晩年になって、自身が生きてきたその軌跡に疑いを抱いている。政治を行う人間を理性と本能とのあいだで分裂した存在と見ていたウルフは、自身をもまた確固とした軸のない自我の持ち主と見ていたのである。リルケの作品が持つ哲学的性向を考慮した上で、未だ教養教育隆盛のケンブリッジで古典学を修め使徒会のメンバーにすらなったというウルフの来歴に鑑みれば、上の引用文からプラトンの洞窟の比喩を想起したとしても牽強付会には過ぎないと思われるが、そのとき、格子裏のウルフは未だ理性の光を認識せざる囚われ人として浮かび上がってくるであろう。「生きたものを閉じ込め、錠や鍵の下か鉄格子の裏に置くのは、飼いならし文明化するための最も効果的な方法の一つである」とは、『恐怖と政治』冒頭の一文であるが、これが人間社会に対する彼の認識であったならば、豹の比喩で描かれたウルフ自身もまた、本来的に動物でありながらに文明化された存在であったということになるのである。⁵⁵そもそもリルケの『豹』は、「詩人の眼がそのまま豹の内部にまで入って行き、まるで詩人はこの豹と一体となってしまったかのよう」な印象を与える詩文である。⁵⁶『恐怖と政治』

50 Woolf, *Sowing*, p. 22.

51 *Ibid.*, pp. 23-24.

52 *Ibid.*, p. 11.

53 やはりブルームズベリー・グループの一員であったロジャー・フライは、日々の認識の中で人が自然に重要なものを選んでいることを指摘しつつ、危急の事態に敢えてそのことを認識しまいとして美へ目を向ける行為に触れ、鑑賞行為が苦を自身から切り離す手段となりうることを示唆している。こうした「現実の生」と「想像の生」との分裂の中で美を楽しむ自我は、ウルフのそれに通ずるものがある。Roger Fry, "An Essay in Aesthetics," in *Vision and Design* (Chatto & Windus, 1920), pp. 11-25.

54 L. S. Woolf, *Beginning Again: An Autobiography of the Years 1911-1918* (The Hogarth Press, 1964), p. 13.

55 Woolf, *Fear and Politics*, p. 5.

56 秋田静男「リルケにおける「檻」の世界—ふたつの詩「アシャンティ」と「豹」をめぐって」『芸文研究』61号(1992年), 203頁。

では人間社会全体が動物園との類比で論じられなければならなかったとすれば、自伝においてはウルフ自身の生が格子に囚われた動物のそれとして語られなければならなかったのである。

その文明人が、しかし自身の生全体に不確かなものしか感じていないという先の自伝での言葉には、肥大した超自我の在り方を思わせるものすらある。人間も個々に檻に閉じ込めずには平和でいられないという既に見た『恐怖と政治』末尾の象の結論は、修辞疑問として、理性とその具現化である国際連盟を通じた国際主義的平和に対するウルフ自身の展望を伴っていたが、そうして政治において檻を脱しようとしていた彼がまた、個人の生において自身の檻に翻弄されていた様子を、ここに想い描くことは不適当ではあるまい。ウルフの政治構想は、動物であることをいくらかでも超克せんとし、しかしそれが究極的には適わないことを知っているという、彼自身の実存意識を込めたものであったように読めるのである。

そして、『恐怖と政治』において統治に必要とされていた恐怖感情もまた、彼が自身の自我に認めていたのと同じ不確実さに由来する人間の生の本来的な特徴であった。自身で「部分的には政治的自伝でもあった」としている『政治原理』（1953年）において、ウルフはこう述べている。⁵⁷

普通の男女は、貧困と不運の恐怖、戦いと殺人と突然死の恐怖、悪しき人・政府・教会の悪行の恐怖に曇らされながら、いつも大変に骨の折れる不安定な生を生きてきた。彼らのほとんどは、友好的でなく自分たちのことに頓着などしない宇宙を生きていることに何となく気づいているのであり、死の恐怖とは個の消滅の恐怖なのである。したがって、死とは、人間の生を支配する感情であるし、恐怖とともに、愛・癒し・安らぎへの欲求がある。⁵⁸

世界を合理的に把握する能力においてどこまでも限界を有する人間にとって、原初的な恐怖は生の条件そのものなのであった。

自伝および自伝的著作で「諦め」と表現されていたこの人生観は、老化のもたらす精神的な衰弱に発したものでは必ずしもない。同様の感覚は、20代の青年ウルフをも既に捕えていた。この時期の彼は、リットン・ストレイチーとのあいだで頻繁に手紙をやりとりしていたが、それら書簡の文面においては、この年代特有の感傷を含み込んだ形においてではあれ、人生に対する同じ冷笑的な態度が表現されているのである。⁵⁹

例えば、1903年9月の手紙を見てみよう。そこでは、自我の空虚さに対する真正な認識だけが死への囚われをなくさせること、しかしそこに至るためには実際に死なねばならないこと、したがって我々は未来における自身の死を見つめる形で死を恐れる半死人のような生を過ごさざるをえないことが説かれている。「現在というものは、大部分、欲望の苦痛と後悔の疼きからできている」—これがウルフの人生理解である。⁶⁰そして、この虚無的な人生観はやはり、ゆえに愉楽なるものが存在するという認識と手を携えている。先立っ

57 L. S. Woolf, *Principia Politica: A Study of Communal Psychology* (The Hogarth Press, 1953), p. v.

58 *Ibid*, p. 163.

59 なお、ウルフは執筆時期不詳の未公刊の作品として1枚の紙に印字された2篇の詩を残しているが、「呪われた者 (Damned)」と題された最初の詩は、天上の愛も悪魔にその肢を掴まれているという意匠で、「不死 (Immortality)」と題された後の詩は、死後には愛する者にとってすらも自身は髪を揺らす風のごときものにしかならないという意匠で、ともにこの世の生の儚さを詠い上げている。ここに込められている情趣は以下で触れる書簡のそれと非常に近く、後のウルフにおいてはより達観的に捉えられていたような無への不安が色濃く現れており、ウルフが自作の詩を公刊したのは1901年から1903年にかけてのみであったことも踏まえると、この2篇の詩もまた同じ20世紀初頭に書かれたものではないかと推測される。Leonard Woolf Archive, part I-N.

60 L. S. Woolf to Lytton Strachey, 20 September 1903, in Spotts, *Letters*, p. 35.

て1901年4月に記されていた今ひとつ書簡においては、あたかも後の伴侶の言葉を取捨するかのようにして、人生とは、価値のない平坦な日々の中で稀にやってくる存在のきらめき、「倦怠の遠大な荒野のなかのオアシス」から成り立つものと表現されていよう。⁶¹ プラトンの『饗宴』を持ち出しつつ語られる、その人生とは、「二つの魂を一つにし、分かれた神秘の輪を完成させようとする苦闘」のようなものであって、ときにはほぼ完全な代替物を見つけたかと思えばやはり不完全で命の灯を再び消してしまう、この連続だといふのである。その上で彼が羨望の眼差しを投げかけるのは、詩人や芸術家など、「自身の魂から別の一つを創り出す」存在であった。退屈な生に命を吹き込むのは美的なものであって、そうして鑑賞の愉楽が浮かび上がってきたときにのみ、我々は本当の意味で生きている—そう彼は述べているのである。⁶² こうして、動物のアナロジーを産み出したウルフの精神は、青年期に既にその根を有していたのであり、知的な鑑賞といふ行為を媒介に生の倦怠と愉楽とを表裏一体とする認識こそが、その基幹を形作っていた。

おわりに

自我を分裂させた非合理的な動物という、彼自身をも含めた人間の在り方は、ウルフにとって、その集団行動の結果を厄介なものにしている根本的な原因に他ならなかった。一方において美や理性を求め、他方において汚らしく無知である、そうした「人間の二重性が、彼の行動を、とりわけ彼の集団での行動を、奇妙に不安定で予測できないものにしてい」たのである。⁶³ しかし、この不安定さと予測し難さは、解き明かす愉楽の源泉でもあった。非合理的な政治的対立が紡ぎ出すところの外交史が持つ面白さについて、ウルフは次のように述べている。「そこで上演される出来事は偏狭なところがより少なくしばしばより劇的であり、その一方、指導者の心理や政治的手腕は、演じ手が敵対国や友好国の君主や大臣であると、独特のうっとりさせる明かりの下で見えてくる」。⁶⁴ そして、楽しむという営みはまた、彼にとって文明的なことでもあった。晩年、彼は、自身が多くのものを楽しんできた人間であるとした上で、こう説いている。「最も文明的な文

61 L. S. Woolf to Lytton Strachey, 9 April 1901, in Spotts, *Letters*, p. 14. 死後にその名も『存在の瞬間』という題で刊行されたヴァージニアの自伝的著作には、次のような言葉が見られる。「不幸なことに、例外的なことを人は思い出すだけなのだ。それに、あることが例外的でもうひとつのことはそうでない理由は存在しないように思われる。……日常の日々は、存在よりも非存在の方をはるかに多く含んでいる」。J・シェルキンド(編)『存在の瞬間—回想記』(近藤いね子他訳、みすず書房、1983年)、106頁～107頁。なお、ウルフ夫妻が相互の作品に影響を与え合う関係にあったことは、1990年代以降つとに指摘されてきた。例えば、Natania Rosenfeld, *Outsiders Together: Virginia and Leonard Woolf* (Princeton University Press, 2000)。

62 Woolf to Strachey, 9 April 1901, pp. 14-15. 先の『政治原理』の言葉にもあったように、ひるがえってこの意識は、虚ろな自我に対して未知な刺激をもたらす他者およびその他者とつながる愛についての評価に連なる。例えば、ヴァージニアの死後、恋人に準ずる関係にあったトレッキー・リッチー・パーソンズへの手紙において彼は、「もし宇宙に現実などというものがあるならば……君—僕の君—と君に対する僕の想いは現実だ」と記した上で、「重要なことというのは本当に数少ないもので、普通重要だと思われることなどでは決してなく、ヴィクトリア広場のような果てしない空間で偶然に出くわす予期しないもの—君のように—なのだ」と語っている。以上で見えてきたのと同じウルフの現実認識の型が、ここには認められる。L. S. Woolf to Trekkie Richie Parsons, 14 January 1944, in Judith Adamson (ed.), *Love Letters: Leonard Woolf and Trekkie Richie Parsons 1941-1968* (Chatto & Windus, 2001), p. 105. なお、愛についてのこうした評価は、ブルームベリー・グループを特徴づけていた価値意識の反映でもあった。ある文化史家の言葉を借りれば、彼らに共通していた認識の一つとは、「人と人とはどこまでも他人であり、それゆえに孤独は避けられず、愛は可能になる」というものであった。S. P. Rosenbaum, *Victorian Bloomsbury: The Early History of the Bloomsbury Group, vol. 1* (St. Martin's Press, 1987), pp. 11-12.

63 Woolf, *The War for Peace*, p. 16.

64 L. S. Woolf, "Statesmen and Diplomats," in *Essays*, p. 170.

明は常に、愉楽をととも善いものと勘定してきたのであり、最も非文明的な文明は常に、幸福に対して禁欲的に顔をしかめてきたのである。⁶⁵ ウルフの自我観・人間観・社会観に関する以上の理解を踏まえた上でこれらの文言に触れるとき、理性的な言説を通して文明的な世界を求めた彼の知的営為とは、不確かな自我が生を実感する実存的な試みを、その背景で企図したものであったように思われる。

「ジェントルマンから芸術家へ」というよく知られた型のイギリス文学史理解においては、20世紀の大衆化と産業化の中で芸術が社会の在り方を左右する力を低下させていくと、他者との接触の中に自己の精神性を要した促す営みとして政治と芸術に存在していた一体性も解体していったとされる。⁶⁶ この図式から考えるならば、人間観を基軸として芸術もまた政治であるとの視座を採っていたウルフの立場は、反伝統のモダニストという戯画化された像に反してむしろ、後期ヴィクトリアンのそれを多分に残すものであったと言えよう。⁶⁷ そうして伝統と革新のあいだを揺れ動いていた彼にとって、政治とは、自己の精神的価値の証明と関わるべきでありながら、しかし本当にそうであるのかは最早疑わしい、そのような活動であったと言うことができよう。

ウルフの伝記を著した作家たちの多くは、彼の政治活動に焦点を当てるにせよ、文学活動までも射程に収めるにせよ、その生に一貫した合理主義の精神を見出してきた。⁶⁸ ときに彼は、理性への信頼を共有していたブルームズベリー・グループの中でも最も理性を重んじた人物とすら言われてきた。⁶⁹ しかし、以上で見たところからすれば、彼はむしろ、理性の限界を明瞭に認識し、そこに苦悩を感じる中でなお理性に価値を認めようと格闘していた存在であった。レナードをヴァージニアの影からようやく救い出したともされる近年の伝記において、ヴィクトリア・グレンディニングは、自身が描き上げた人物の性格を次のように表現している。「残忍にして情け深く、粗暴にして自制的、意固地にして不偏不党一両極端で矛盾した人間として、彼には、公私いずれの生においても、自身の戦うべき悪魔がいた。理性への信頼が彼をある道へと導いたならば、非合理的な情熱がまた別の道へと導いた。彼は人をまごつかせ、内向的で、魅力的で、常にアウトサイダーであった」。⁷⁰

65 Woolf, *Journey Not the Arrival Matters*, p. 183.

66 川本静子『イギリス教養小説の系譜—「紳士」から「芸術家」へ』（研究社、1973年）。

67 関連して、晩年の彼が、英帝国の在り方をより好意的に見るようにもなっていることは興味深い。「経済的帝国主義に関する私の見方が当時から変わったことは確かです。それが何一つ良いことをしなかったと私がこれまでに言ったなどということはないと思いますが、あの本『『アフリカにおける帝国と交易』』を書いたときに私が思っていたよりはかなり多くの良いことをしたのだとは言えます」。L. S. Woolf to Margery Perham, 24 August 1955, in Spotts, *Letters*, p. 439. なお、ウルフにおけるヴィクトリア朝精神の名残を強調する見方として、Bernard Crick, "Leonard Woolf: His Whole Life, Politics and PQ," *The Political Quarterly* 77 (October–December, 2006), pp. 505–6. また、モダニストも伝統から自由であったわけではなく、むしろその枠の中でこそ革新を生み出していったことは、今日の文化史研究でも指摘されている。例えば、Jay Winter, *Sites of Memory, Sites of Mourning: The Great War in European Cultural History* (Cambridge University Press, 1995).

68 Duncan Wilson, *Leonard Woolf: A Political Biography* (St. Martin's Press, 1978); Selma S. Meyerowitz, *Leonard Woolf* (Twayne Publishers, 1982).

69 J. K. Johnstone, *The Bloomsbury Group: A Study of E. M. Forster, Lytton Strachey, Virginia Woolf, and Their Circle* (Secker & Warburg, 1954), p. 16. ブルームズベリー・グループにおける理性への信頼については、次の評が簡潔に言い表している。「おそらくは話し合っていたこと自体が一つの特徴なのだ。なぜなら、話し合いをしないグループというものもあって、彼らは叫び、わめき、そのあげくなぐり合いを始めるのだから。ブルームズベリーはこういうことは一つもやらなかった。意見がひじょうにくいちがっていても、彼らは話し合った。いや、それ以上のことをした。彼らは全体として理性的に話し合い、友達どうしが喋るように、友達どうしの遠慮なさや愛情とをもって話し合った。事実、彼らは平和な理性的な討論を信じていた」。クエンティン・ベル『ブルームズベリー・グループ』（出淵敬子訳、みすず書房、1972年）、99頁。

70 Victoria Glendinning, *Leonard Woolf: A Biography* (Free Press, 2006), pp. 1–2.

ウルフの自我はどこか分裂していて、それゆえに彼には知的遊戯の対象として自身と人間を見る審美的な視線があった。そして、政治もまた、この美的な感覚に支えられたその視線の先に横たわっていた。あるいは、政治こそが、彼の審美的な視線の投げられる先でなければならなかったとすら言えるかもしれない。彼自身が語る所、ヴィクトリア期の一般的な人間にとって、政治とは、「遠く離れた、どこまでも遠く離れた」ものであり、関わらないことこそが「〈通常〉」とか「〈通例〉」といった以上の何か「〈自然な〉」活動であった。⁷¹ ウルフ自身をも含めた彼らは、あたかもそうであることが自然の理に沿うことであるかのように、「1919年以降にはどんな小さな子どもすらもが有してきた程度の政治的関心をも持ってはいなかったのである」。⁷² 政治が社会の中で重視されるようになっていくというそのこと自体が、社会心理の同時代的な在り方を象徴していたし、ひるがえって政治が心理的な事柄として論じられねばならない理由もそこにあった。⁷³

以上、本稿では、ウルフの政治思想が彼の自我観・人間観と相並び立つ形で展開されていたことを論じてきた。では、この知見は国際政治学史の研究にとってどのような意味を有しうるのであろうか。端的に言えば、彼の言説における政治と心理学的思惟との関係を以上のように捉えるところからは、いわゆる現実主義批判に関わる彼の国際関係論上の議論も、これまでとは異なる文脈に据えることが可能となる。以下、この点について若干の整理を行うことで、結論に代えたい。

カーの『危機の二十年』が1939年に出版されたのと前後して、ウルフは、『平和のための戦争』（1940年）などいくつかの著作で同書への批判を展開している。近年、現実主義が理想主義を打ち破ったという国際政治学史観を再検討に付す上でも、この忘れ去られてきた批判は重要な位置づけを与えられている。具体的には、カーとウルフの双方の議論を見比べた上で、カーの側には国際主義への誤解があり、実際にはウルフにも政治を権力の問題として捉える視点が存在していたこと、逆にウルフの側にもカーへの誤解があり、後者の展開した道徳論は見落とされていたことが指摘されている。⁷⁴

このような解釈は、二人の対立点を政治に関する具体的な構想に関わるものと見た場合に成り立つものである。しかし、以上で明らかにしたウルフの問題関心を踏まえるならば、議論は認識論的な次元でも展開されていたと見るべきである。例えば『平和のための戦争』後半の一節で、ウルフは確かに、「主権国家の諸利益と権力には、国際連盟を理想主義的としてその失敗を不可避なものとし、あるいは対立する諸利益と権力政治と戦争の国際システムに代わって法と和解と調整された協力の国際システムを用いることを不可能にしている本質のないし固有なものなどは、何一つない」と述べ、国際連盟支持を理想主義的で権力政治的な国際社会観を現実主義的とする見方に批判を投げかけている。ただ、直後に続くのは、次のような一文である。「一方において利益対立と権力政治組織の心理があり、他方において共通利益と国際協調組織の心理がある中で、選ぶべきはそのどちらかなのである」。つまり、ここでは、具体的な政治構想の違いとともに、それに先立つ政治の（間主観的な）意味づけられ方こそが問題として取り上げられているのである。今の引用の直前にも、問題は「理想か現実かの選択ではない」という言葉が据えられているが、これもまた、政治の定義の在り方自体が議論の中心であったことの証左と言える。⁷⁵ あるいは、『門前の蛮人』などでも、「現

71 Woolf, *Principia Politica*, pp. 10, 12.

72 *Ibid.*, p. 11. そうして人の生における政治の位置づけが変わったとする第一次世界大戦直後の時期にも、ウルフは、「人間とその社会とはあまりにも強力であまりにも自己破壊的になりつつあるために、我々はもはや、当面のあいだ折に触れて政治的に生きる、といったことが適わなくなっている」と述べている。L. S. Woolf, "The Fog of History," *Nation and Aethnaeum* (27 August, 1921), p. 762.

73 ウルフの国際政府論が、言語戦略の面において、国民国家的な認識枠組みの転換を図る試みであったとの指摘として、Yuko Ito, "Leonard and Virginia Woolf's Rhetoric of New International Space," *IVY* (2005), pp. 21-42.

74 Wilson, *Leonard Woolf*, chap. 8.

75 以上全て、Woolf, *The War for Peace*, p. 175.

実的なものと観念的なものとは決して合致せず、少なくとも未だ合致したことがない」という形で、同様の表現が見られるが、既に見たようにその歴史的な意味変化こそがウルフにとっての政治をめぐる最大の争点であったことを踏まえたならば、〈現実主義批判〉を繰り広げた彼は、その裏において、問題の立て方自体をより本質的な議題として取り上げていたと見るべきなのである。⁷⁶

この知見の下でこそ、一方において理性を疑っていたウルフが、他方において理性ある文明的世界を展望していたことの整合性も理解可能となる。やはり『平和のための戦争』の中の、「理性に関する覚書」と題された結論部分で、彼はまず次のように述べている。「今日の世界を見わたしてみれば、誰であれ、人間は政治的活動を行う上でかなりの程度まで理性に影響を受けていると信じたり、他の人がそう信じていると想像できたりするなどは解しがたいと思われる」。しかし、その上で彼はこう続けている。「人間が政治的活動を行うにあたって理性からさほど影響を受けていないという事実は、彼らの社会的活動が常に非合理的であり、非合理的でなければならないということではない」。⁷⁷つまり、理性に関する議論においてもまた、ウルフは現実と観念との不可避的な不一致という観点を背景に据えていたと見るのできるのである。実に、この不一致を乗り越えられるかのように偽装する中でこそ、実際の国家とあるべき国家とを混同するような、あの未開人の誤った信条が現れてくるであろう。⁷⁸

ウルフの心理学的な思惟は、決して洗練されたものではなく、むしろ今日の視点から見ればかなり粗雑なものであった。その擬似フロイト主義的な人間本性観は、当時においてもいささか陳腐であったというべきかもしれないし、モダニストにおける自我の分裂というテーマも、文化史上では既によく知られている。ただ、だとすれば、国際関係論においてはそうした論点すらも見落とされてきたということである。しかし、以上で見てきたように、こうして既存の歴史的な知見と国際政治学史とを繋ぎ、自我観を基礎とした心理学的な体系として捉えてこそ、ウルフの政治思想をめぐるいくつかの論点は整合的に理解できるのである。そして、彼の国際政治学史上の位置づけもまた、そこから再検討に付すのできるのである。

[付記] 本稿の執筆に際して、英国サセックス大学図書館所蔵のレナード・ウルフ未公開資料を利用した。また、本稿は科学研究費補助金（若手研究(B)25870022）に基づく研究の成果の一部である。

(旭川校准教授)

76 Woolf, *Barbarians*, p. 57. 彼が批判したカーもやはり、理想と現実がほとんど不可避的にすれ違おうとしていたが、この意味にしても、以上のようなウルフの問題認識と対照させて理解する必要があるだろう。差し当たり、この点に関する本稿筆者の見方として、西村邦行『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路』(昭和堂、2012年)、第5章。

77 Woolf, *The War for Peace*, pp. 240-41.

78 存在と当為の不一致というテーマは、実のところ、ウルフの知的生活初期からの関心であった。第一次世界大戦中の小論で彼は、ホップズ以来の哲学者たちは「存在するものから存在してきたものを区別し、存在して欲しいものをその両方から区別することをし損ねてきた」と述べている。L. S. Woolf, "Magna Latrocinia: The State as It Ought to Be and as It Is," *International Journal of Ethics* 27 (October, 1916), p. 36. なお、ウルフは続けて、(カーが理想主義に属せしめていた) 19世紀の功利主義者たちからボザンケら観念論者たちに至るまでの思想家らにも、同じことが当てはまる旨を指摘している。ウルフのこの認識がカーとの対決を迎えた1940年に至るまで持続していたとするなら—そして、戦間期を通じてウルフが権力政治の現実をより明確に受け入れていったことからすれば、この推定にも一定の妥当性はあると思われるが—、カーが見た意味での理想主義者にウルフを含めることは確かに誤りである。ただ、カーにしても、理想主義を批判する中でウルフの名を持ち出すことなど一度もなかった。その意味でもやはり、両者の対立を現実主義対理想主義という文脈で論じること自体がそもそも誤りだと考えるべきである。